

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：12604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730731

研究課題名(和文) 幼小連携の推進における教員養成の役割に関する比較教育史的研究

研究課題名(英文) A Comparative Historical Study on the Role of Teacher Training in Kindergarten-Primary Education

研究代表者

遠座 知恵(Enza, Chie)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：20580864

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、幼小連携の推進における教員養成の役割について、比較教育史的な視点から考察を行った。20世紀のアメリカでは、幼少連携の提唱者たちが啓蒙活動を行うとともに、幼学年教育学科を創設して新たな教員養成に着手した。その卒業生たちは、各地の師範学校における養成や現場における指導に携わり、幼小連携に対する教師の理解を促進したと考えられる。日本では、幼小連携に関する情報をアメリカのみならずヨーロッパからも積極的に収集していたものの、教員養成の抜本的な改革までには至らなかった。

研究成果の概要(英文)：This Study attempted a comparative historical analysis on the role of teacher training in kindergarten-primary education. In the United States, the advocates launched the campaigns and established kindergarten-primary departments with new teacher training programs. The graduates of these departments took teaching positions in normal schools or supervised in-service teachers. Japanese educational leaders gathered and studied European and American information on kindergarten-primary education but they couldn't reform their teacher training in line with it.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：進歩主義教育 大正新教育 幼小連携 教員養成 カリキュラム

## 1. 研究開始当初の背景

近年わが国では、幼小連携に対する課題意識が高まっている。しかし一方で、その実現に際して、教育現場が抱える困難も多数報告されている。幼小連携をわが国の教育現場に根づかせるためには、その実践を担う資質と能力を備えた教師の養成が欠かせないにも関わらず、この点に関する研究は極めて乏しいのが現状である。

筆者はこれまで、20世紀のアメリカで幼小連携カリキュラムの開発に主導的役割を果たしたコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ(以下、ティーチャーズ・カレッジ)と、アメリカの教育情報をもとに附属校・園で実践的研究をすすめたわが国の代表的事例(東京女子高等師範学校・奈良女子高等師範学校・明石女子師範学校)を取り上げて検討を進めてきた。これまでに行った検討の結果、ティーチャーズ・カレッジでは、幼稚園カリキュラムの構成法を導入した低学年カリキュラムの研究開発が進められ、幼稚園教師をそのまま第一学年の教師として採用する方針がとられていたのに対し、こうした研究態勢はわが国では成立しなかったことを指摘した。奈良女子高等師範学校や東京女子高等師範学校では、附属幼稚園と小学校双方で幼小連携カリキュラムに関する教育情報を収集していたにもかかわらず、その研究は全く別に進められ、従来の制度的枠組みを超えたカリキュラム開発に至らなかったことから、筆者は日米間の研究態勢の差異を生み出す要因についてさらに分析を行う必要があると考えるに至った。

幼小連携の阻害要因については複数の可能性があげられるが、本研究では、教員養成の役割に焦点を当てて分析を行うこととした。わが国では、幼小連携に対応した教員養成の改革は、現代においても課題にとどまっており、養成面での遅れが見受けられる。わが国における幼小連携の推進を阻む要因を分析する上で、幼稚園と小学校自体の制度面での位置づけの相違のみならず、日米間の教員養成システムや養成カリキュラムの違いを明らかにしていくことが有効であると考えられる。

幼稚園教員養成史においても、これまで幼小連携の実現にむけた教員養成の取り組みの実態は、本格的に検討されてこなかった。わが国では、橋川喜美代(『保育形態論の変遷』春風社、2003年)がシカゴ大学教育学部に設置された2年課程について紹介しているのみであり、アメリカの先行研究においても、幼小連携を課題とした教員養成改革の詳細な経緯や実際に開発された教員養成カリキュラムなどは十分に検討されていない。本研究は、幼小連携という近年の教育課題に対するアプローチを意図して、幼稚園教員養成史に新たな知見をもたらすことを目指した。

## 2. 研究の目的

本研究では、20世紀のアメリカと日本において幼小連携に関する研究をすすめた代表的機関に着目し、そこで行われた教員養成の実態とその役割に関して比較教育的な考察を行うことを目的とした。具体的には、次の点を明らかにすることを目指した。

- (1) 幼小連携推進を課題としたアメリカの教員養成改革の実態。この課題に先駆的に着手したコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジとシカゴ大学教育学部に関する事例研究を行う。教員養成改革の理念と構想、幼小連携に対応した教育組織の創設やそのカリキュラムの内容と特質を明らかにする。
- (2) 幼小連携を課題とした教員養成プログラムのアメリカにおける普及過程。この点については、幼小連携を推進した指導者であるティーチャーズ・カレッジのヒル(Patty Smith Hill)やシカゴ大学のテンプル(Alice Temple)らによる啓蒙活動や、初等教員養成議論に対する専門職能団体における議論と提案に着目してこの点を明らかにする。
- (3) 幼小連携に関するアメリカの動向に着目していた東京女子高等師範学校・奈良女子高等師範学校・明石女子師範学校の教員養成システム。これらの機関では、中等教員養成、初等教員養成、保姆養成(保育実習科や保姆養成科の設置など)が行われていたため、各校における教員養成システムの構造やそのカリキュラム等を明らかにする。
- (4) 幼小連携とそれに対応した教員養成に関する日本の指導者たちの情報収集や課題認識。当時幼小連携に関する研究をすすめた北沢種一、堀七蔵、倉橋惣三、木下竹次、森川正雄、及川平治、甲賀ふじなどを取り上げて、彼らがアメリカの動向や日本の現状をどのようにとらえていたのかを明らかにする。

## 3. 研究の方法

幼小連携の推進にむけて、アメリカで行われた教員養成改革の実態、幼小連携教員養成プログラムの普及過程を解明するため、渡米して、関連する一次史料を所蔵する大学の附属図書館や、公共図書館、歴史資料館等を訪ねて調査を行う。また、国内調査も並行的に実施し、東京女子高等師範学校、奈良女子高

等師範学校、明石女子師範学校における当時の教育組織と教員養成カリキュラムに関する史料の収集を行う。また、調査対象とする主要人物の著作物・雑誌記事論文については、目録を作成して順次史料収集を進めていくこととした。収集した史料をもとに、上記の点に関する分析を行う。

#### 4. 研究成果

上記の研究計画に基づいて、本研究では、次のような史料調査を実施した。

##### (1) アメリカにおける幼小連携の推進状況と教員養成改革の動向

ルイビル無償幼稚園協会における幼稚園教員養成カリキュラム

ニューヨークにおける幼稚園数の増加と幼稚園教員に対する需要

19世紀末～20世紀初頭のティーチャーズ・カレッジにおける教育組織、同カレッジにおける幼稚園教員養成の改革議論とカリキュラム改造の実態

ティーチャーズ・カレッジへのP.Sヒル招聘の経緯、彼女の着任後に始まった教員養成改革と附属幼稚園におけるカリキュラム開発

専門職能団体による幼稚園モデルの教育養成改革の提案

##### (2) 日本側の情報収やその影響の実態

甲賀ふじの渡米時の職歴・学習歴（ハワイ無償幼稚園在職時の幼稚園教育実践、シカゴ大学への留学記録と同大学で履修したカリキュラムの内容）と帰国後の活動

東京女子高等師範学校、奈良女子高等師範学校、明石女子師範学校における教員養成システム、とりわけ東京女子高等師範学校における教員養成と附属小学校における研究態勢の関係性

北澤種一、木下竹次、及川平治、倉橋惣三による幼小連携に関する情報収集の実態

海外調査においては、ニューヨーク公共図書館、ルイビル公共図書館、ハワイ大学附属図書館、シカゴ大学附属図書館スペシャルコレクション、西イリノイ大学附属図書館大学史資料館、メリーランド大学附属図書館等を訪ねて、各種報告書や雑誌記事、新聞記事、書簡類、自筆ノート類などを収集することができた。国内調査においては、北澤種一の遺族と面会し、彼の残した自筆ノートや研究に使用した文献類など、これまで未発掘の史料を収集することができた。

また、以上の調査から、とくに次のような点が明らかとなった。

コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジでは、P.S.ヒルの着任以前から、幼稚園教員

養成に対する改革の気運が高まっていた。19世紀末～20世紀初頭の改革において、幼小連携を意識した新たな科目の導入や、フレーベルの幼児教育原理である「自己活動」を養成レベルにも適応し、学生に自主性ととも研究的能力を育てることが課題とされていた。デューイやキルパトリックらの影響により、アメリカでは、フレーベルの教育原理が教育学の中で重要な位置を占めており、幼稚園に限らず初等教育や養成レベルのカリキュラム開発においてもその原理の批判的継承が意識されていたと考えられる。P.S.ヒルの着任後、幼学年教育学科を創設したティーチャーズ・カレッジは、その卒業生たちを、幼小連携を推進する師範学校のスタッフや指導主事のポストに就職させ、幼小連携の推進において主導的役割を果たしていくこととなった。

幼小連携に関する日本の情報収集については、従来着目してきたようにアメリカからの影響もみられたが、1920年代後半には、留学や国際新教育連盟（The New Education Fellowship）の機関誌などを通じて、ヨーロッパからも新たな情報を得ていたことが明らかとなった。筆者は、日米間の比較教育史的考察を課題として本研究を遂行してきたが、今後はさらに、ヨーロッパからの情報収集の全体像やその影響の実態に関しても解明していく必要があると考えている。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

(1) 遠座知恵「F. G. ボンサーによる初等教育カリキュラムの開発過程 インダストリアル・アーツの性格とプロジェクトの系譜」『日本の教育史学』第 56 集、2013 年、97-109 頁。（査読有り）  
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009662533>

(2) 遠座知恵「入沢宗寿によるプロジェクト・メソッドの受容 情報収集の実態と研究の特質」『東京学芸大学紀要（総合教育科学系）』第 63 集、2012 年、21-30 頁。（査読無し）  
<http://ir.u-gakugei.ac.jp/handle/2309/127855>

〔学会発表〕（計 3 件）

(1) 遠座知恵「北澤種一によるデモクラシー概念の受容 共通主義の基底としての興味」教育哲学会第 56 回大会、2013 年 10 月 12 日、神戸親和女子大学。

(2) 遠座知恵「F. G. ボンサーによる初等教育カリキュラムの開発過程 インダ

ストリアル・アーツの性格とプロジェクトの系譜」教育史学会第 55 回大会、2011 年 10 月 2 日、京都大学。

- (3) 遠座知恵「進歩主義教育におけるインダストリアル・アーツの編成原理 F・G・ボンサーによるカリキュラム開発の特質とその日本の変容に注目して」日本カリキュラム学会第 22 回大会、2011 年 7 月 17 日、北海道大学。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

遠座 知恵 (ENZA CHIE)  
東京学芸大学・教育学部・准教授  
研究者番号：20580864

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし